

「日本気象学会夏期特別セミナー（第二回夏の学校）」の報告

第二回夏の学校実行委員会*・講演企画委員会

「日本気象学会夏期特別セミナー（第二回夏の学校）」を、1991年7月19日（金）から21日（日）まで二泊三日の日程で、京都府北桑田郡京北町にある京都府立ゼミナールハウスで行なった。以下にその概略を報告する。

1. 経過

夏の学校は、第一回が昨年8月に長野県伊那市にある信州大農学部手良山演習林宿舎において行なわれた。これについては1991年2月号の「天気」に報告されている。

昨年11月に実行委員会を組織して以来準備を進め、5月末から6月中旬にかけて申し込み受付を行なった。参加者は、東北から九州までの7大学、2機関、2企業からの54名であった。今回、新たに九州からの参加があったことが特筆される。

2. 日程および講演

7月19日の夕刻集合し、まず、バーベキューを囲んだ。その後研修室に入り自己紹介を行なった。1人1分の制限の枠を感じさせない楽しい紹介が続いた。

二日目から三日目にかけて次のように講演を行なった。開催地色を出すことを意識し、中層大気に関する話題に重点をおいたテーマ配分となった。時間としては質疑応答も含めて一件一時間とした。

二日目午前

- (1) 成層圏におけるロスビー波の非線型相互作用
牛丸 真司（名大・水圏）
- (2) 雲対流と大気の平衡湿度分布
中島 健介（東大・理）

二日目午後

- (3) 南半球における成層圏循環場の年々変動
下田 直樹（京大・理）
- (4) 複雑多様地表面上における大気-陸面相互作用
—複雑地形上の局地循環と熱収支—
桑形 恒男（東北大・理）

招待講演

運と勘—気象学における発見的研究の舞台裏—
廣田 勇（京大・理）

三日目午前

(5) 気象でメシを食う方法—気象庁の場合—
上島 功（大阪管区気象台・業務課）

まず牛丸氏が成層圏におけるロスビー波の非線形的振舞いに関して、波と平均流および波同士の相互作用についての数値モデルを用いた研究について話を行ない、中島氏が単純かつ即物的にモデル化した雲対流だけで大気の平衡湿度分布がどの程度説明できるかについて話した。午後に移り、まず下田氏が衛星観測データの解析によって南半球成層圏循環において特徴的な年々変動がみられたという話を行ない、続いて桑形氏は複雑地形による力学的効果と熱的交換の事例解析をもとに、特に陸面上での地表面-大気相互作用に着目した話を行なった。

以上のレビューに続いて、京都大の廣田教授がこれまでの研究生活の中で立ち会った自他の数多くの発見的研究所とその舞台裏を熱っぽく語られた。日頃は聞くことの出来ない興味あふれるお話に、全員が引き込まれるように聞きいていた。（この時の話しは、「気象談話室」として、近々本誌に掲載の予定。）

最終日には上島氏が、現在の気象庁組織の概観や、これまでの仕事にまつわる楽しい話題について軽快な口調で語った。

一日目の自己紹介終了後と二日目の夕食後は、ともに自由時間であった。宿泊室のいくつかに分かれて集まり、酒を飲み交わしつつ様々な話に花を咲かせての交流が遅くまで続いた。参加者全員が入ることができて、飲食可能な大部屋がなかったことを惜しむ声が多かった。

三日目の講演終了後に反省会を行なった。最後に次回の世話役として東北大を選出し、昼食後解散した。

次回では新たに北海道からの参加も期待したい。

最後になりましたが、講演企画委員会との共同開催に際して御尽力頂いた第一回実行委員及び学会理事会の皆様、そして今回の企画に御協力頂いた多くの皆様に心からお礼申し上げます。

* 菅田誠治、石岡圭一、下田直樹、山田慎治、永戸久喜、野沢 徹（京都大理学部）、西岡佐喜子（大阪管区気象台）、玉川一郎（京都大防災研究所）